住民意識と学生意識にみる緑地との関わり方の現状と緑地活動への参加意欲

The Study of Relation with Open-Spaces and Expectation for the Open-space activities by the Inhabitants and the University Students

中島 敏博* 田代 順孝** 古谷 勝則*

Toshihiro NAKAJIMA Yoritaka TASHIRO Katsunori FURUYA

Abstract : We approached evaluation for some open-spaces and expectation for the open-space activities at fixed area by Chiba university students and Koyama inhabitants; they have approximate territory of daily life and they are possible for joint work. They responded the three points. First, the students and the inhabitants mainly use the open-space with promenade. And students use the open-spaces about one time per a week but inhabitants not so much. Second, they want to join the open-space activities if the open-space is within 60 minutes walk (students) or within 30 minutes walk (inhabitants). But situation of neighbor area, they have the motivation less than 1,000m (students) or 1,500m (inhabitants) from the base. Third, inhabitants evaluated the open-spaces slightly farther than students did. But both students and inhabitants, high grading open-spaces are within 1,000m from the base, or within 500m from the neighborhood. Whole of results, we clear the trend of evaluation for open-spaces at fixed area by students and inhabitants. And we understood that open-spaces near the neighborhood can get the participants for the management activities.

Keywords: Civic activities, Questionnaire, Inviting area, Open-Spaces

キーワード: 市民活動, アンケート, 誘致圏, 緑地

1. はじめに

都市部では緑との触れ合いが広がる一方で、緑地を管理するなどのより積極的な活動が展開されるようになった。しかし、活動拠点となる場の整備が進んでいるとはいえない。中島ら(2004)¹⁾の研究から里山活動では活動者の高齢化が進み、定期的な活動員の確保や若手の確保を活動の継続のために求める声があることがわかる。こうした例を見ても緑地を利用した市民活動(以後、緑地活動)への参加者の需要と供給は同一の都市部であっても十分に満足できる状況にはないと考えられる。住民が生活の中で緑地活動に参加する状況を把握し、そこから緑地活動が持つ影響範囲を知ることが必要である。

緑地活動への参加については上甫木ら(1995)²⁾の研究によって日常的に緑地を活用することで緑地活動への参加意欲が高まることが言われている。里山活動限定であるが、中島ら(2004)³⁾の研究では参加者が所要時間30分以内までの範囲に居住していることを指摘している。そして、中島ら(2005)⁴⁾の研究によって、緑地と生活圏あるいは拠点との距離によって緑地の利用意欲や評価が決定し、緑地評価が緑地活動への参加意欲に強く関わる言われている。西浦ら(2005)⁵⁾の研究では緑地活動の経験が緑地活動への関心をより高め、次への参加意欲が高まったとしている。つまり、緑地活動には緑地の利用経験や緑地評価が影響し、緑地までの距離が緑地利用および緑地活動への継続的な参加に影響を与える。そして、緑地活動を経験することで継続的な参加につながる言えるが、これまでの研究から想定できる。しかし、これまでの研究は学生やニュータウン、里山活動など限定的な条件下で行われた調査が多い。

そこで、同一地域内で異なる主体の緑地への認識と緑地活動への参加意欲を明らかにし、より複合的な地域の緑地評価や緑地活動の可能性を探ることを目的とする。それぞれの周辺緑地への認識と緑地活動への意欲を拠点としている場および生活圏の広がり

と対比しながら論じていき、地域における緑地の評価状況と緑地活動の可能性を考察する。

2. 調査方法

調査対象地は千葉県松戸市南西部の千葉大学松戸キャンパス(以後、松戸Cとする)および調査協力が得られた小山地区とした(図-1、図-2)。対象地区は大学が立地し、住民だけではなく、大学に通う学生も緑地活動の担い手として期待できる。被験者は松戸Cに通う学生(以後、学生とする)と、小山地区住民(以後、住民とする)とした。なお学生は学部特性から緑地に関する専門的な教育を受けている。

学生を対象とした調査は2004年12月13日~25日に行い、直接配布し、回収箱を設置して回収した。被験者は千葉大学園芸学部および大学院自然科学研究科所属の千葉大学松戸Cに通う学生とした。ただし学生が所属する学問領域の特性上、緑地活動などの情報が多く、関心も高いことは注意が必要である。241枚を配布し、152枚(回収率63.1%)を回収した。小山住民は2005年9月3日~20日を調査期間とし、戸別に訪問して直接配布し、郵送にて回収した。200枚を配布し、165枚を回収した。記入がまったく無い2枚を無効票とし、有効回収率は81.5%であった。被験者の属性を表-1に示す。

調査は3つの項目からなる。第一に、緑地の利用頻度と利用目的をたずね、被験者の緑地利用の現状を明らかにする。第二に、緑地活動として樹木の伐採や管理など樹林地の管理を行う里山活動、農業を体験、支援するような援農活動、花壇などで花を植えるなどの美化活動、公園の清掃や管理を行う愛護活動、動植物などの観察会の5つの活動を定義し、各活動に対する参加経験、参加意欲、月1回の定期的な参加するためにかける松戸Cあるいは居住地からの所要時間(時速4kmの徒歩移動を基準とする)をたずねた。これにより、被験者の緑地活動への関心と緑地活動

*千葉大学大学院自然科学研究科 **千葉大学園芸学部

図－1 対象地位置図

が発生した際の需要を把握した。第三に、拠点を中心とした4km四方（中心から徒歩30分の範囲円を含む方形区⁶⁾）の範囲内の1ha以上の緑地9箇所（図－2）の利用状況と相対評価、緑地活動が行われていると仮定した場合の参加意欲、4km四方の範囲内の生活圏をたずねた。これにより、拠点周辺の実際の空間で緑地の利用状況や評価と距離の関係を明らかにした。なお拠点の中心は対象地区を面として見た場合の重心とし⁷⁾、拠点と緑地の距離はそれぞれの重心間を結ぶ距離とした⁸⁾。生活圏からの距離については生活圏と緑地の最短距離とした。

緑地の相対評価は1番から9番を9点から1点として配点した。評価できない、未記入の緑地は0点として評価し、どれも重要と記述があった場合についてはサンプルから除外した。地図上の緑地の位置、規模⁹⁾や拠点および生活圏と緑地の距離の測定、重心の把握はGISシステムのArcInfo9.0を使用した。

3. 学生の周辺緑地への認識と緑地活動への参加意欲

(1) 緑地の利用状況

まず、緑地の利用頻度は月1～3回をピークに週1～2回の利用にやや偏りのある山型に利用頻度が出現している（表－2）。緑地の利用目的では散歩がもっとも比率が高く、ほぼ6割の人が緑

表－1 被験者の属性一覧

	住民(N=163)	度数	比率	学生(N=152)	度数	比率
年齢	20代	8	4.9	学部2年生	80	52.6
	30代	13	8.0	学部3年生	19	12.5
	40代	32	19.6	学部4年生	19	12.5
	50代	39	23.9	修士1年生	19	12.5
	60代	30	18.4	修士2年生	10	6.6
	70代以上	25	15.3	博士課程	2	1.3
	無回答	16	9.8	研究生	3	2.0
性別	男	62	38.0	男	71	46.7
	女	82	50.3	女	81	53.3
	無回答	19	11.7			
居住年	5年以内	10	6.1	1年以内	32	21.1
	5～10年	9	5.5	2年以内	12	7.9
	10～20年	31	19.0	3年以内	19	12.5
	20～30年	35	21.5	4年以内	6	3.9
	30年以上	62	38.0	5年以内	4	2.6
	無回答	16	9.8	5年以上	5	3.3
				居住せず	74	48.7

* 学生の居住年は松戸市内の居住年であり、大学の敷地内に居住しているとは限らない

共通の対象緑地: 松戸中央公園、浅間神社、和名ヶ谷川センター、矢切斜面
緑地、一条会病院裏樹林、堀ノ内貝塚公園
住民調査の対象緑地: 江戸川緑地 a、松戸 C、水元公園
学生調査の対象緑地: 江戸川緑地 b、小塚山公園、戸定部

図－2 対象地詳細図および対象緑地位置図¹⁰⁾

地に散歩を目的として赴いていることがわかる。そのほかでは休憩（34.9%）、通勤通学（28.3%）、趣味（19.7%）、運動（14.5%）、調査（11.8%）が被験者の10%以上の利用目的となっているものである。散歩が主流であるが、各利用目的の選択率が高くても35%程度にとどまっていることから、散歩以外の利用目的は利用者の嗜好によって分散しているものと考えられる。通勤通学および休憩については比較的高い利用目的であるが、通学先の松戸Cを緑地と認識して通っているものと考えられ、さらに学生生活の多くを過ごしている点からも通勤通学、休憩が高くなったものと考えられる。

(2) 緑地活動への参加意欲

緑地活動については初見の回答が0.7%であることから学生のほとんど（99.3%）が活動を認識しており、所属学部専門性が発揮されている（図－3）。緑地活動への参加経験は58.7%と二人に一人はこれまでに一度は緑地活動を経験している。

緑地活動への参加意欲は、「参加しない」（7.9%）から考えて、

表－2 被験者の緑地利用状況

	住民(N=163)	度数	比率	学生(N=152)	度数	比率
緑地の利用頻度	毎日	8	4.9	毎日	14	9.2
	週5	2	1.2	週5	8	5.3
	週3～4	10	6.1	週3～4	14	9.2
	週1～2	21	12.9	週1～2	42	27.6
	月1～3	46	28.2	月1～3	48	31.6
	ほぼ行かない	56	34.4	ほぼ行かない	25	16.4
	無回答	20	12.3	無回答	1	0.7
緑地の利用目的	散歩	101	62.0	散歩	89	58.6
	運動	45	27.6	運動	22	14.5
	家族	34	20.9		—	—
	趣味	24	14.7	趣味	30	19.7
	休憩	21	12.9	休憩	53	34.9
	観察	21	12.9		—	—
	通勤通学	8	4.9	通勤通学	43	28.3
	食事	7	4.3	食事	12	7.9
	市民活動	6	3.7	市民活動	5	3.3
		—	—	調査	18	11.8
	その他	5	3.1	その他	8	5.3
	無回答	25	15.3		—	—

図-3 緑地活動への参加経験

図-4 緑地活動への参加意欲 (住民には無回答 15.8%がある)

90%以上が何らかの活動への参加意欲を持っていることがわかる (図-4)。活動別にみると里山活動、援農活動への意欲が他の活動に比べて高いことがわかる。学部専門性から農業や林業などに興味を持つ学生が多いと考えられ、若いことで体力が必要な活動に対しても参加できるように感じたり、里山活動や援農活動を具体的にイメージできる情報を持っていたりすることも要因として挙げられる。

緑地活動に定期的に (月1回) 参加するためにかける所要時間については、図-5、表-3 のようになった。累積比率 80%以上を基準としてみると、学生では美化活動、愛護活動が「徒歩 30 分以内」、里山活動、援農活動、観察会については「徒歩 60 分以内」の緑地で活動が行われれば参加する可能性がある。つまり、緑地から 2 km~4 km 以内にある大学の学生は、定期的に緑地活動へ参加する可能性を有しているといえる。美化活動や愛護活動は公園など身近な緑地を対象とする場合が多いことなどが、所要時間を短くしていると考えられる。里山活動や援農活動、観察会は「活動が生活している地域の近隣では行えない」という実際を見据えた意見や、「日常から少し離れた」といって少し離れた場所で緑地活動をしたいという意見が学生の調査票の欄外に記入されており、考慮する必要がある。また、緑地活動に定期的に参加するためにかける所要時間への回答率をみると、学生で 90% 前後の回答を得た。これは、参加意欲をたずねた際の活動ごとの比率に比べて所要時間への回答率のほうが高くなっている。前者が直接的な問であり、後者は各活動への参加に対して許容される所要時間を問いかけており、潜在的な緑地活動への参加の可能性

として読み取れる。その点からみて、ほとんどの学生は各活動に参加する可能性を持っているといえる。

(3) 生活圏の広がりや周辺緑地の相対評価

学生の生活圏は松戸 C と松戸駅とを結ぶ動線を中心として、楕円状に広がりをもっていて (図-6 右図)、平均面積は 104.44ha であった (表-4)。

学生の緑地利用は利用経験の有無しがはっきり分かれ、特に生活圏分布から離れた緑地は極端に評価が低くなった (表-5)。評価点が中点 (5 点¹¹⁾) より高い緑地は 930m 以内の緑地であり、特に評価点が高かった戸定邸、江戸川緑地は緑地活動があれば参加したい緑地としての選択率がほかの緑地より高かった。表-6 の相関係数をみると、評価点では距離 (-0.89) と経験 (0.95)、参加 (0.84) が非常に高い相関を見せている。つまり、近くにあり、利用したことのある緑地であれば周辺の緑地より評価が高くなり、緑地活動に参加してみたいとなるといえる。また、緑地活動への参加には規模 (0.81)、経験 (0.79)、日常 (0.77)、評価が非常に高い相関を示し、大きい緑地で日常的に利用しており、周辺のほかの緑地より評価が高いとより緑地活動に参加したくなるといえる。参加を目的変数として重回帰分析を行ったところ、規模 (0.4)、日常 (0.5)、評価 (0.9) の項目が有意に関係しており (重相関係数 0.96)、相対評価が高いことが緑地活動への参加意欲をより高めるといえる。評価を目的変数として重回帰分析を行ったが、有意な項目が得られなかった。

学生が相対評価の基準とした項目は緑地を知っていることが最も高く (32.4%)、緑地までの距離 (27.6%)、歴史がある (22.8

図-5 緑地活動に参加するためにかける所要時間 (徒歩)

表-3 緑地活動に参加するためにかける所要時間への回答率

	住民	学生
里山活動	58.0%	91.5%
援農活動	54.9%	90.8%
美化活動	64.8%	91.5%
愛護活動	63.0%	88.9%
観察会	61.7%	88.9%

表-4 生活圏の面積

単位:ha	住民	学生
平均	241.64	104.44
最小値	2.30	17.25
中央値	172.85	51.88
最大値	1,147.82	1,161.00

* 住民、学生ともに N=151

表－5 学生の周辺緑地の活用状況と相対評価（平均評価点順）

	拠点からの距離	規模 (ha)	経験 (%)	日常 (%)	参加 (%)	評価点 平均点	評価点得点帯									
							9	8	7	6	5	4	3	2	1	0
C 戸定邸	260m	2.29	59.2	11.2	29.6	6.47	36.2	15.1	16.4	7.2	3.3	3.3	2.0	1.3	3.3	11.8
A 江戸川緑地b	920m	25.58	75.0	28.3	52.0	6.43	30.9	17.8	13.2	14.5	5.3	3.3	0.7	0.7	1.3	12.5
E 浅間神社	490m	2.05	58.6	2.0	14.5	5.47	9.2	25.0	16.4	15.8	5.9	2.6	3.3	2.0	0.7	19.1
F 矢切斜面緑地	930m	9.98	46.7	2.6	15.1	5.16	11.2	17.8	13.2	11.8	17.1	2.6	3.3	1.3	2.0	19.7
B 松戸中央公園	700m	2.13	68.4	24.3	11.8	4.78	4.6	12.5	18.4	12.5	19.1	3.9	4.6	3.3	0.7	20.4
G 一条会病院裏樹林	1400m	2.12	1.3	0.0	2.0	2.17	0.0	0.7	2.6	3.3	6.6	15.8	18.4	5.3	7.9	37.5
H 堀之内貝塚	2040m	3.16	3.3	0.0	2.0	2.17	0.7	0.0	4.6	5.9	4.6	10.5	11.2	17.1	5.3	38.2
D 和名ヶ谷クリーンセンター	1490m	3.46	8.6	0.0	0.7	1.98	0.0	0.0	0.7	4.6	7.9	14.5	9.9	11.8	10.5	38.2
I 小塚山公園	2010m	2.73	2.6	0.0	2.0	1.63	0.0	0.7	1.3	3.9	3.3	6.6	9.9	13.8	19.1	39.5

図－6 学生と住民の生活圏の分布（住民：左図、対比図：中央図、学生：右図）

*外郭の一辺が4kmであり、50mメッシュで集計している。

表－6 単相関行列

		距離	規模	経験	日常	評価	参加
住民	距離	1.00					
	規模	-	1.00				
	経験	-0.68	-	1.00			
	日常	-0.68	-	0.91	1.00		
	評価点	-0.84	-	0.93	0.89	1.00	
	参加	-	-	0.91	0.95	0.85	1.00
学生	距離	1.00					
	規模	-	1.00				
	経験	-0.86	-	1.00			
	日常	-	-	0.79	1.00		
	評価点	-0.89	-	0.95	-	1.00	
	参加	-	0.81	0.79	0.77	0.84	1.00

*「-」は無相関を表す

図－7 評価点ごとの生活圏から緑地までの距離（学生，単位：m）

％），緑地の大きさ（22.8％），緑地を利用した（21.4％）と続いた（表－7）。

個別に生活圏と緑地の距離を計測し，評価点とのかかわりをみると図－7のようになった。ほぼ距離と評価点に相関があることが見て取れるが，評価点5以上と4以下で生活圏との距離が急激に開いており，生活圏500m以内にある緑地が評価点5以上を取りやすい傾向がわかる。その他の項目を見ても，生活圏から500mと1,000mの間でポジティブな（経験，日常，参加）項目とネガティブな（未経験，非日常，不参加）項目の選択率の反転が起きている（表－8）。

4. 住民の周辺緑地への認識と緑地活動への参加意欲

（1）緑地の利用状況

住民は緑地にほぼ行かない場合をピークに月1～3回の利用にやや偏りのある山型に利用頻度が出現している（表－2）。緑地

表－7 緑地の相対評価基準¹²⁾

評価基準	住民		学生	
	度数	比率	度数	比率
自然として重要	103	63.2	18	12.4
緑地を知っている	96	58.9	47	32.4
緑地までの距離	87	53.4	40	27.6
防災上で重要	82	50.3	8	5.5
景色として見える	73	44.8	8	5.5
緑地を利用した	73	44.8	31	21.4
歴史がある	58	35.6	33	22.8
緑地の大きさ	56	34.4	33	22.8
好み	39	23.9	15	10.3
緑地の特色	24	14.7	22	15.2
他の緑地との位置	14	8.6	14	9.7
無回答	25	15.3	7	4.6

の利用目的では散歩がもっとも比率が高く、6割以上の人が散歩を目的として緑地に赴いていることがわかる。そのほかでは運動(27.6%)、家族(20.9)、趣味(14.7%)、休憩(12.9%)、観察(12.9%)が被験者の10%以上の利用目的となっているものである。住民も散歩が主流であり、各利用目的の選択率が高くても30%未満にとどまっていることから、散歩以外の利用目的は利用者の嗜好によって分散しているものと考えられる。

(2) 緑地活動への参加意欲

住民は「活動を知っているが参加したことが無い(参加経験無)」と「緑地活動を初めて知った(初見)」を合わせて78.4%であり、住民は緑地活動への参加経験があまり無いことがわかる(図-3)。また初めて知った被験者も37.8%いて、緑地活動の経験が無い人の半分は知識も持っていないことがわかる。

緑地活動への参加意欲は、「無回答」と「参加しない」を合わせて36.6%であり、63.4%の住民は緑地活動への参加意欲があるといえる(図-4)。特に美化活動、愛護活動を中心に比較的意欲が高くなった。

緑地活動に定期的に(月1回)参加するためにかける所要時間については、観察会を除く4つの活動で、80%以上を基準に見て「徒歩30分以内」と回答している(図-5)。つまり、緑地から2km以内の住民は、定期的に緑地活動へ参加する可能性を有しているといえる。観察会は「徒歩60分以内」であり、他の活動に比べてやや遠方でも参加意欲が見られた。観察会は作業が伴わないので、そうした手軽さが活動への参加範囲を広げたのではないだろうか。

また、緑地活動に定期的に参加するためにかける所要時間への回答率をみると、住民で60%前後の回答を得た(表-3)。参加意欲では美化活動は36.0%の被験者が意欲を示しているが、潜在的な参加の可能性では64.8%とほぼ倍の比率となっている。同様に里山活動や援農活動でも50%以上の比率となっていて、居住地周辺の緑地であれば潜在的に緑地活動の担い手がいる可能性がいくる。

(3) 生活圏の広がりや周辺緑地の相対評価

住民の生活圏は小山地区と松戸駅を結ぶ動線を中心として、東方向にやや幅を持って広がる形になっている(図-6左図)。動線は線路の西側に形成されているが、江戸川に阻まれる形で生活圏が同心円に広がらなかったものと考えられる。生活圏の平均面積は241.64haであった(表-4)。

周辺の緑地利用では、利用経験が80%を超える緑地はおおむね拠点から1,350m以内の緑地に収まった(表-9)。しかし、5点以上の評価点は松戸Cと浅間神社の640m以内の緑地2箇所のみで、よい評価を受ける緑地は近距離に限定された。相関係数をみると、評価点は規模以外の4項目について非常に高い相関を持っていた(表-6)。重回帰分析では距離(-0.3)、経験(0.4)、日常(0.4)、参加(0.7)が有意に関係を持っており(重相関係

表-8 生活圏と緑地の活用状況

		距離 (m)	生活圏と緑地の距離 度 数 比 率 傾 斜	経 験 N=1347	未経験 N=1362	日 常 N=445	非日常 N=2264	参 加 N=406	不参加 N=2303	
住 民	圏内	458	33.9	1.0	29.2	5.6	43.7	11.2	49.9	13.5
	500	458	33.9	1.0	22.6	11.4	22.4	15.5	27.0	15.7
	1000	225	16.7	2.0	22.1	11.9	13.3	17.3	18.6	16.5
	1500	127	9.4	3.6	9.5	23.0	3.9	19.2	4.5	17.8
	2000	69	5.1	6.6	5.7	26.4	1.4	19.7	0.0	18.3
	2500	13	1.0	35.2	10.9	21.8	15.3	16.9	0.0	18.3
	合計	1350	100.0		100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
学 生	圏内	213	15.7	1.0	55.3	6.7	77.7	15.7	48.8	16.7
	500	598	44.0	0.4	38.4	13.1	22.3	19.8	42.8	17.4
	1000	178	13.1	1.2	1.6	26.9	0.0	21.5	2.2	22.1
	1500	127	9.3	1.7	3.5	26.2	0.0	21.5	1.5	22.1
	2000	243	17.9	0.9	1.2	27.1	0.0	21.5	4.8	21.8
	合計	1359	100.0		100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

*緑地までの距離は生活圏から緑地までの最短距離を指す

**経験-未経験、日常-非日常、参加-不参加は対であり、それぞれひとつの設問から1/0データで得ている。また、網掛けは対応している項目で高い比率の項目を指す。

***経験から不参加までの列の数値はすべて項目の度数Nに対する比率を表す。

数0.97)、距離、経験、日常はほぼ同等の比重であり、緑地活動に参加したい緑地はやや比重が高く、高い評価につながるといえる。参加を基準でみると、経験、日常、評価点が非常に高い相関を持っていた。参加を目的変数として重回帰分析を行ったが、有意な項目は得られなかった。

住民が相対評価した基準をみると、自然として重要(63.2%)であるかが最も高く、緑地を知っている(58.9%)、緑地までの距離(53.4%)、防災上で重要(50.3%)、景色として見える(44.8%)、緑地を利用した(44.8%)と続いた(表-7)。

個別に生活圏から緑地までの距離と評価の関係をみると図-8のようになった。評価点が下がるほど近距離の比率が下がる傾向が見て取れ、生活圏から見ても近距離であるほど評価が高いこと

図-8 評価点ごとの生活圏から緑地までの距離(住民、単位:m)

表-9 住民の周辺緑地の活用状況と相対評価(平均評価点順)

	拠点からの距離	規模(ha)	経験(%)	日常(%)	参加(%)	評価点平均	評価点得点帯									
							9	8	7	6	5	4	3	2	1	0
C 千葉大学松戸C	640m	14.90	84.0	34.4	31.9	5.53	33.7	12.3	8.0	8.0	5.5	4.9	0.0	0.0	0.6	27.0
E 浅間神社	260m	2.05	87.7	50.9	33.7	5.37	10.4	25.8	16.0	12.3	6.7	1.2	2.5	3.1	0.0	22.1
F 江戸川緑地a	1350m	32.22	84.0	54.6	36.2	4.71	14.1	13.5	13.5	12.3	9.2	4.3	1.2	0.6	0.0	31.3
B 松戸中央公園	1190m	2.13	82.8	26.4	13.5	4.58	4.9	16.0	18.4	8.0	16.0	4.9	2.5	1.2	0.6	27.6
A 水元公園	1350m	74.90	93.9	39.9	38.7	3.95	16.0	8.6	6.1	8.6	11.7	3.7	1.2	2.5	6.7	35.0
G 矢切斜面緑地	1160m	5.16	41.1	11.0	7.4	2.78	2.5	1.2	6.7	8.6	11.7	11.7	9.8	4.9	3.1	39.9
D 和名ヶ谷グリーンセンター	1800m	3.46	50.9	9.8	4.3	2.36	0.0	0.6	6.1	8.0	8.6	11.7	12.9	1.8	8.0	42.3
I 堀ノ内貝塚公園	2160m	3.16	23.3	2.5	0.6	1.36	0.0	0.6	0.6	1.8	3.7	5.5	11.7	12.3	16.0	47.9
H 一条会病院裏樹林	1650m	2.12	22.1	1.8	0.0	1.35	0.0	0.0	0.0	1.8	4.3	6.1	8.0	21.5	11.0	47.2

が分かる。生活圏から緑地までの距離とその他の項目をみると、経験と参加は1,000mと1,500mで評価がポジティブからネガティブに反転し、日常は500mと1,000mの間で反転した（表－8）。

5. 地域における緑地評価と緑地活動の可能性

学生は散歩、通学、休憩を主目的として週1回前後の緑地利用を行う傾向にある。専門教育から緑地活動への知識や経験があり、意欲も高い。特に里山活動や援農活動への意欲が高く、徒歩60分程度の距離があっても通うと言える。実際の緑地の利用は拠点から1,000m以内の緑地をよく利用し、そうした緑地は評価が比較的高く、緑地活動への参加意欲も高かった。緑地活動への参加意欲については、所要時間で得られた距離が4,000m以内であったことから、実際の緑地評価と大きく離れた。生活圏と緑地評価の関係では、生活圏が駅から松戸Cの動線周辺に集中しており、徒歩30分圏内（2km）の緑地であっても、生活圏から500m以内の緑地とそれ以外の緑地で評価に差がつく傾向にある。生活圏が狭い要因は松戸市外からの通学者であり、松戸Cと最寄り駅の往復がほとんどである点と、松戸市内居住者も居住年が短く、まだ地域についての習熟が浅い点などが考えられる。

住民は、散歩を主として様々な目的で月1回程度の緑地利用をする傾向にある。緑地活動について知らない場合が多く、経験者も少ない。住民の6割程度は愛護活動や美化活動を中心として緑地活動に参加する意欲を持っている。どの活動についても徒歩30分以内の緑地であれば参加する可能性を持っている。実際の緑地利用は居住地から1,500m以内の緑地を利用し、緑地活動があれば参加してもよいと考えている。緑地評価では、高い評価を得た緑地は居住地から1,000m以内の緑地であった。所要時間で得られた参加意欲のある緑地範囲が2,000m以内であり、学生に比べてその差は少なかった。緑地利用をポジティブに捉えられている範囲は生活圏から500m～1,000mであり、生活圏から1,000m以上離れると利用されにくくなる傾向であった。

この地域では生活圏が狭い学生は住民に比べて近隣の緑地に利用が偏り（図-6 中央図）、評価も近隣の緑地に偏る傾向がみられた。生活圏と緑地の評価の関係では、高い評価点を得る緑地は住民も学生も生活圏から500m以内の緑地である。しかし、利用状況や緑地活動への参加意欲については、学生はポジティブな評価は生活圏から500mまでに偏り、住民はやや遠方までポジティブに評価している。地域においては学生よりも住民のほうが拠点や生活圏からやや遠方までポジティブに評価する傾向にある。

緑地活動にける所要時間では学生で4,000m、住民で2,000mという回答である。しかし、両者とも地域の緑地では拠点からより近距離の緑地までしか参加意欲を示していない。評価が高い緑地は参加意欲につながることを考慮すると、両者ともに拠点から1,000m以内の緑地までしか緑地活動に参加しないといえる。生活圏からの距離でみても、遠くまで緑地を評価する住民でも参加をポジティブに捕らえるのは1,000m以内までで、累積比率をみても他の評価項目（利用、日常は80%未満）に比べて参加は90%以上となり、より近距離の傾向が強い。

評価される緑地や緑地活動への参加意欲が見られる緑地を拠点からの方角でみた（図－9）。学生あるいは住民が評価する（平均評価点5点以上）緑地は、矢切斜面緑地を除いて生活圏の広がりと同様に北側にある。また、緑地活動への参加意欲がみられる緑地（参加の選択率10%以上）はほぼ一定距離以内の全方位にみられる。評価の高い緑地はそのまま緑地活動へ参加意欲がみられる緑地でもあり、生活圏に近い緑地ほど緑地活動への参加が得やすい緑地であることがいえる。

本研究ではほぼ同一地域に生活圏を有する学生と住民の二者について、緑地評価と緑地活動への参加意欲の傾向を明らかにした。

図－9 評価される緑地の分布

現状では公園や都市開発から逃れた残存緑地に対して緑地活動が行われている。緑地活動がより積極的に展開されることで地域の緑地が快適になるだろう。その点で、今後は緑地活動を誘発するような緑地の配置や質、そして緑地活動に関わる主体について考えていく必要がある。

補注および引用文献

- 1) 中島敏博・古谷勝則（2004）：千葉県北総地域の残存緑地に対して里山活動参加者が期待する里山イメージに関する研究：ランドスケープ研究 67(5), 653-658
- 2) 上南木昭春・池口仁（1995）：ニュータウン内の保全林に対する身近さと管理運営への参加意向に関する研究：ランドスケープ研究 58(5), 261-264
- 3) 中島敏博・古谷勝則（2004）：千葉県北総地域の残存緑地における里山活動の成立年と緑地面積の変遷の関係：環境情報科学 18, 49-54
- 4) 中島敏博・古谷勝則（2005）：学生意識に見る若者の緑地保全活動への参加意思誘発プロセス：環境情報科学 19, 151-156
- 5) 西浦千春・重松敏則・朝廣和夫（2005）：農山村における農林作業体験が都市部の高校生の環境保全意欲に及ぼす効果：ランドスケープ研究 68(5), 613-616
- 6) 引用文献4)の中島ら（2005）の研究成果による。
- 7) 緑地と拠点の距離は外周からの距離ではないため個別の被験者の滞在・居住点とは誤差が発生する。松戸Cは最長345m、小山地区で最長930mの誤差が出る。
- 8) 住民の調査では拠点が小山地区内に分散しているため、重心と重心を結ぶことで誤差の減少を考慮した。学生の調査は小山地区と方法をそろえた。
- 9) 緑地の位置と規模はバスから販売されている空中写真（2002年）を参考にして、国土地理院発行の細密数値情報データ（1994年）を改変して地図を作成して把握した。
- 10) 学生は通学者であることから、松戸Cの拠点性を明確にするために松戸市内の緑地に限定した結果、対象地内の1ha以上の緑地9箇所すべてを採用した。住民は10箇所以上の1ha以上の緑地があったので、方位や距離、連続性などを考慮して採用した。松戸Cと戸定邸は連続した緑地であるために松戸Cのみを採用した。また、小塚山公園と堀ノ内貝塚は小山地区の重心からほぼ同じ方向、距離のため、堀ノ内貝塚のみを扱った。江戸川緑地はそれぞれの拠点の重心からの距離がより近いほうを採用した。
- 11) 1から9点の中間は5点であり、平均点が5点以上であるということは、評価が比較的高かったことがいえる。
- 12) 学生は自由記述からキーワードを抜き出す方法であり、住民は選択式の回答方式であったため、選択率に差が出ている。また、回答率は住民が100%、学生は95.4%（145件）であった。